

# 小学校高学年児童および中学生の いじめ被害といじめ加害の安定性に関する研究

原田 宗忠\* 中井 大介\*\* 黒川 雅幸\*\*

\* 非常勤講師

\*\* 学校教育講座

## Stability of Bullying and Victimization in Early Adolescence

Munetada HARADA\*, Daisuke NAKAI\*\* and Masayuki KUROKAWA\*\*

\*Part-time Lecturer of Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

\*\*Department of School Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

### Abstract

This study explored the stability of bullying and victimization in early adolescence. In total, 1,354 children aged 10-15 years from elementary and junior high school participated in this study over a 3-year period. Participating children answered self-report questionnaires that measured bullying and victimization. Each school year, in the first questionnaire, participants were asked to report the degree of bullying and victimization experienced from April until the present. The second and third questionnaires recorded bullying and victimization experienced between the previous self-report and the present. Previous self-reported bullying and victimization showed significant positive correlations with subsequent self-reported bullying/victimization, even if class members changed each school year. Mechanisms underlying the stability of bullying and victimization were discussed.

### 問題と目的

令和元年度における小学校のいじめの認知件数は484,545件、中学校では106,524件報告されている（文部科学省，2020）。この件数は、認知件数として測定されるようになった平成18年度以降で最も多い。学校におけるいじめについては、火急に取り組まなければならない課題である。

いじめが起きる要因については、外山・湯（2020）が1か月間の短期縦断的調査を実施し、個人要因と学級の要因のダイナミクスによって生じる可能性があることを指摘している。外山・湯（2020）では、いじめに否定的な考えをもっている児童はいじめ加害行動を行わない傾向が示された一方で、学級集団の雰囲気良好であると、加害行動が継続されることが示された。これまでも、いじめにかかわる要因として仮想的有能感（松本・山本・速水，2008）や学級規範（大西，2007）などが検討されており、個人要因と学級による要因があることが示されている。

原田・中井・黒川（2020）では、小学5年生から中学3年生を対象に、1年間において3時点の縦断調査を実施し、いじめ被害の安定性として $r = .36 \sim .58$ の相関係数を得ている。また、いじめ加害の安定性として $r = .37 \sim .47$ の相関係数を得ている。これらの結果より、いじめ被害やいじめ加害については、年度内において比較的安定していると考えられる。

Juvonen, Nishina, & Graham（2000）は、6年生および7年生（12歳～15歳）を対象に、前の年から縦断調査により、いじめ被害の安定性として $r = .37$ を得ている。Salmivalli, Lappalainen, & Lagerspetz（1998）では、8年生を対象に、2年前（14歳～15歳）からの縦断データを用いて $r = .49$ のいじめ被害の安定性を得ている。また、いじめ加害については、クラスが変わっていない子どもの方が変わった子どもよりも安定していたが、いじめ被害の安定性については、クラスが変わった子どもと変わっていない子どもで違いがみられなかったことが示されている（Salmivalli, et al., 1998）。Burk, et al.（2011）は1年生（7歳）と3年生（9歳）

を対象に、2年間の縦断調査を実施したところ、1年生から3年生の加害では51%、被害では28%安定しており、3年生から5年生の加害では38%、被害では27%安定していることが示されている。

Sourander, Helstelä, Helenius, & Piha (2000) は8歳の時のフォローアップ研究として、彼らが16歳になった時にも調査を実施した。男子においては、8歳時の15%がいじめを行い、13%がいじめ被害を受けていた。女子に関しては、8歳時の7%がいじめを行い、12%がいじめ被害を受けていた。

これらの結果から示唆されることは、いじめ被害およびいじめ加害については年単位でも比較的安定している傾向があるということである。しかし、国内におけるいじめに関する研究は、横断的な調査によるものが中心であり、縦断的な調査による報告は多くはない。まして年度を越えた縦断調査による報告は極めて少ないのが現状である。

従来の横断調査では、年度内におけるいじめの要因として、学級の要因が関係していることは明らかにできても、クラスが変わった時に、いじめ加害やいじめ被害が継続するか、あるいはなくなるかどうかについて示唆を得ることができないと考えられる。

上記のように、海外における年度を越えた縦断調査で、いじめ被害及びいじめ加害の安定性が指摘されていることを踏まえれば、日本においてもクラス替えなどの環境変化を踏まえた上で、海外と同様に年度を越えたいじめ被害及びいじめ加害の安定性が見られるかを検討する必要があると考えられる。そこで、本研究では、いじめ加害経験および被害経験に関する調査を、年度を越えた縦断調査で実施し、その変化について報告することを目的とする。

## 方法

### 調査時期

調査は2017年度、2018年度、2019年度の3年間に渡って縦断的に実施された。各年度において、第1回を4～5月、第2回を9月～10月、第3回を1月～2月

に実施し、計9回の調査を行った。

### 調査対象者

小学校2校の5、6年生および中学校2校の1年生から3年生が対象となった。記入漏れがあった場合や欠席による未回答者は分析対象から除いた。欠測のない分析対象者の内訳はTable1の通りであった。3年間で1,354人が対象となった。なお、調査対象者となった学校では、毎学年クラス替えを行っており、3～5学級あるクラスのメンバーが入れ替わっている。そして、小学校2校と中学校2校は、A小学校からB中学校へ、C小学校からD中学校へ一部の児童が進学するという関係にあり、中学校進学時にも仲間関係が変化する可能性がある。

### 調査方法

担任教師のもとで、学級単位で質問紙調査を実施した。本調査は、実施後の対応や支援を行えるようにするために、記名式で行った。児童・生徒には調査の趣旨を、こころの健康度を測るためと説明した。この調査で明らかになったことは、今後の学校生活に役立てていくことを伝えた。

### 調査内容

いじめの被害経験といじめの加害経験 岡安・高山(2000) で用いられているいじめ加害経験に関する3項目(例えば、「友だちといっしょになって、だれかに、わざとぶつかったり、遊ぶふりをしてたいたり、けったりした。）」といじめ被害経験に関する3項目(例えば、「だれかから、仲間はずれにされたり、無視されたり、かげで悪口を言われた。))を使用した。近年のいじめの動向を踏まえ、「だれかから、いやがらせやいたづらをされた(らくがきをされたり、物をかくされた)」を「だれかから、いやがらせやいたづらをされた(自分が傷つくことをネット上に書き込まれたり、物をかくされた)」に修正した。この修正は加害経験についても同様に行った。1回目の調査では、今の学年になってから回答時までのことを回答してもらっ

Table1  
分析対象者の内訳(人)

	2017年度		2018年度		2019年度
小学5年生	137	→	192(3回目:86)	→	199(3回目:0)
小学6年生	89	→	137(3回目:68)	→	192(3回目:0)
中学1年生	147	→	89	→	137
中学2年生	289	→	147	→	89
中学3年生	301	→	289	→	147

注1) 学校の都合により、2018年度第3回の調査では、実施できなかった小学校があったため、5年生は86名、6年生は68名の回答となっている。また、2019年度第3回の調査においても小学校の都合を踏まえて実施しなかった。

た。2回目、3回目の調査では、それぞれ1回目の調査、2回目の調査以降から回答時までのことを回答してもらった。研究上のいじめの定義には、加害者の攻撃意図、繰り返しのある攻撃行動、加害者と被害者のパワーバランスがとれていないことが含まれるが (Olweus, 1993), 本研究においては当事者の認知を重視し、加害経験および被害経験ともに当事者の認知に基づいて、自己報告によっていじめと判断した。「次のようなことがどれくらいあてはまるかを聞きます」と教示をして、該当するいじめの測定を行った。具体的な回数を尋ねる方法ではなく、評定尺度法により、あてはまらない (1点), あまりあてはまらない (2点), どちらでもない (3点), ややあてはまる (4点), とてもあてはまる (5点) の5件法で尋ねる形式にした。

倫理的配慮

調査の実施にあたっては、著者らの所属する大学の研究倫理委員会の審査を受けた。回答者の許可なく家族に結果を見せることはないこと、不利益を被ることがないこと、秘密が守られることを伝えた。また、調査の後には、結果を基に、第1著者が具体的な支援について学校に助言した。

結果

いじめ被害経験およびいじめ加害経験の記述統計量

それぞれの調査回においていじめ被害経験3項目といじめ加害経験3項目の得点の信頼性係数を算出した (Table2)。いじめ被害経験については $\alpha=.52 \sim .91$ であった。また、いじめ加害経験については $\alpha=.08 \sim .97$ であった。概ね十分な値が得られていたものの、3項目のうち、特定のいじめ加害経験の項目に高い値が示されたことによって、 $\alpha$ 係数が.08と極めて小さかった調査回 (2017年度第1回小学6年生対象) も見られた。信頼性が低かった調査回については、結果の解釈に留意する必要がある。

それぞれ3項目の得点を平均したものをいじめ被害経験といじめ加害経験の得点とした。それぞれの調査回におけるいじめの被害経験およびいじめ加害経験の平均値 (標準偏差) はTable3の通りであった。

いじめ被害経験およびいじめ加害経験の、連続する2時点間の安定性について

3年間の調査対象者のデータを統合した。例えば、2017年度小学5年生、2018年度小学5年生、2019年度小学5年生のデータを統合して小学5年生のデータと

Table2

各調査回におけるいじめ被害経験といじめ加害経験の信頼性係数 ( $\alpha$ )

	2017年度			2018年度			2019年度		
	第1回	第2回	第3回	第1回	第2回	第3回	第1回	第2回	第3回
小学5年生	.66	.79	.75	.75	.72	.60	.64	.72	
	.71	.76	.75	.65	.84	.66	.75	.77	
小学6年生	.08	.83	.77	.78	.77	.71	.72	.66	
	.64	.78	.64	.75	.82	.64	.72	.72	
中学1年生	.53	.64	.83	.74	.86	.78	.74	.64	.76
	.81	.82	.86	.52	.88	.69	.78	.86	.67
中学2年生	.83	.78	.91	.86	.85	.93	.82	.84	.85
	.77	.77	.86	.84	.83	.71	.76	.76	.61
中学3年生	.79	.83	.89	.88	.92	.91	.91	.91	.97
	.83	.83	.81	.87	.87	.85	.75	.82	.91

注 1) 上段：いじめ加害経験，下段：いじめ被害経験

Table3

各調査回におけるいじめ被害経験といじめ加害経験の平均値 (標準偏差)

	2017年度			2018年度			2019年度		
	第1回	第2回	第3回	第1回	第2回	第3回	第1回	第2回	第3回
小学5年生	1.31(0.56)	1.32(0.61)	1.31(0.56)	1.22(0.52)	1.21(0.51)	1.29(0.55)	1.17(0.42)	1.28(0.54)	
	1.64(0.93)	1.57(0.89)	1.54(0.84)	1.50(0.77)	1.55(0.95)	1.48(0.73)	1.51(0.84)	1.58(0.89)	
小学6年生	1.10(0.29)	1.15(0.56)	1.10(0.35)	1.22(0.50)	1.26(0.55)	1.19(0.44)	1.22(0.50)	1.21(0.48)	
	1.22(0.54)	1.25(0.62)	1.26(0.60)	1.39(0.75)	1.44(0.86)	1.20(0.46)	1.49(0.81)	1.43(0.73)	
中学1年生	1.13(0.35)	1.16(0.41)	1.15(0.40)	1.05(0.18)	1.12(0.42)	1.09(0.39)	1.18(0.43)	1.18(0.43)	1.18(0.42)
	1.34(0.71)	1.41(0.77)	1.33(0.71)	1.18(0.44)	1.21(0.62)	1.18(0.43)	1.26(0.62)	1.24(0.59)	1.32(0.63)
中学2年生	1.27(0.59)	1.23(0.51)	1.24(0.56)	1.09(0.37)	1.17(0.47)	1.15(0.52)	1.09(0.31)	1.15(0.44)	1.08(0.29)
	1.41(0.73)	1.40(0.71)	1.40(0.71)	1.35(0.79)	1.33(0.67)	1.25(0.53)	1.23(0.56)	1.21(0.46)	1.15(0.37)
中学3年生	1.25(0.54)	1.19(0.46)	1.22(0.53)	1.27(0.61)	1.21(0.52)	1.20(0.52)	1.13(0.39)	1.14(0.43)	1.23(0.65)
	1.47(0.81)	1.38(0.75)	1.36(0.67)	1.44(0.79)	1.35(0.68)	1.34(0.69)	1.30(0.59)	1.23(0.57)	1.27(0.68)

注 1) 上段：いじめ加害経験，下段：いじめ被害経験

した。全ての調査回間に関して、いじめ被害経験およびいじめ加害経験の相関係数を算出した (Table4)。

まず、連続する2回の調査間の相関係数を、小学5年生第1回から中学3年生第3回まで算出した。いじめ被害経験については $r = .45 \sim .74$  (いずれも $p < .01$ )、いじめ加害経験については $r = .32 \sim .68$  (いずれも $p < .01$ ) といずれも弱い正の相関から強い正の相関までみられた。

ここで、得られた連続する2回の相関係数を「年度内の安定性 (第1回と第2回、および第2回と第3回)」と「年度を越えた安定性 (第3回と翌年度の第1回)」に分けてみると、いじめ被害経験の年度内の安定性については $r = .46 \sim .74$  (いずれも $p < .01$ )、年度を越えた安定性については $r = .45 \sim .61$  (いずれも $p < .01$ ) であった。いじめ加害経験の年度内の安定性については $r = .32 \sim .68$  (いずれも $p < .01$ )、年度を越えた安定性については $r = .39 \sim .60$  (いずれも $p < .01$ ) であった。さらに、年度を越えた時の相関係数がその前後と比べて差がみられるかどうかを検討するため、対応のある相関係数の差の検定を行った。いじめ加害経験における、中学1年生の第3回と中学2年生の第1回の相関係数が、中学1年生の第2回と第3回の相関係数よりも

有意に高かった ( $p < .05$ ) 以外は、有意な差はみられなかった<sup>1)</sup>。

いじめ被害経験およびいじめ加害経験の学年間の安定性について

次に、小学5年生 (第1回から第3回) と小学6年生 (第1回から第3回) の相関についてみると、いじめ被害経験では無相関から $r = .55$  ( $p < .01$ )、いじめ加害経験では $r = .34 \sim .59$  (いずれも $p < .01$ ) の弱い正の相関から比較的強い正の相関までみられた。また、小学5年生 (第1回から第3回) と中学1年生 (第1回から第3回) の相関についてみると、いじめ被害経験では $r = .24 \sim .50$  (いずれも $p < .01$ )、いじめ加害経験では $r = .40 \sim .57$  (いずれも $p < .01$ ) の弱い正の相関から比較的強い正の相関までみられた。

同様に、小学6年生 (第1回から第3回) と中学1年生 (第1回から第3回) の相関についてみると、いじめ被害経験では $r = .30 \sim .57$  (いずれも $p < .01$ )、いじめ加害経験では $r = .25 \sim .49$  (いずれも $p < .01$ ) の弱い正の相関から比較的強い正の相関までみられた。また、小学6年生 (第1回から第3回) と中学2年生 (第1回から第3回) の相関についてみると、いじめ被害

Table4  
いじめ被害経験・加害経験の安定性

	小学5年生			小学6年生			中学1年生			中学2年生			中学3年生		
	第1回	第2回	第3回	第1回	第2回	第3回	第1回	第2回	第3回	第1回	第2回	第3回	第1回	第2回	第3回
小学5年生	第1回	.45**	.40**	.40**	.39**	.34**	.57**	.41**	.50**						
	第2回		.46**	.58**	.53**	.53**	.58**	.49**	.40**	.48**					
	第3回			.39**	.59**	.39**	.49**	.59**	.51**	.48**	.47**				
小学6年生	第1回	.35**	.45**	.45**	.48**	.30**	.41**	.25**	.30**	.19	.03	.03			
	第2回		.35**	.45**	.48**	.47**	.32**	.43**	.32**	.41**	.05	.21*	.10		
	第3回			.07	.47**	.55**	.34**	.61**	.49**	.25**	.27**	.28**	.06	-.03	
中学1年生	第1回	.37**	.50**	.40**	.47**	.45**	.57**	.50**	.55**	.60**	.38**	.47**	.50**	.52**	.43**
	第2回		.24**	.41**	.44**	.51**	.54**	.42**	.55**	.46**	.47**	.31**	.33**	.42**	.42**
	第3回			.33**	.41**	.49**	.30**	.38**	.39**	.50**	.53**	.60**	.51**	.44**	.52**
中学2年生	第1回				.24*	.60**	.63**	.42**	.40**	.56**		.68**	.52**	.52**	.56**
	第2回				.08	.14	.32**	.39**	.40**	.52**	.74**		.53**	.43**	.56**
	第3回				.03	.17	.30**	.34**	.35**	.43**	.54**	.60**		.55**	.67**
中学3年生	第1回							.35**	.48**	.47**	.56**	.57**	.61**		.58**
	第2回							.38**	.40**	.38**	.49**	.51**	.61**	.64**	
	第3回							.31**	.44**	.41**	.44**	.44**	.54**	.61**	.65**

\*\* $p < .01$    \* $p < .05$

注1) 対角より上はいじめ加害経験、下はいじめ被害経験の値である。

注2) 上段: Pearsonの積率相関係数, 下段: サンプルサイズ

経験では無相関から $r = .63$  ( $p < .01$ ) まで得られた。いじめ加害経験では無相関から $r = .28$  ( $p < .01$ ) まで得られた。

中学1年生（第1回から第3回）と中学2年生（第1回から第3回）の相関についてみると、いじめ被害経験では $r = .34 \sim .56$ （いずれも $p < .01$ ）、いじめ加害経験では $r = .31 \sim .60$ （いずれも $p < .01$ ）の弱い正の相関から比較的強い正の相関までみられた。また、中学1年生（第1回から第3回）と中学3年生（第1回から第3回）の相関についてみると、いじめ被害経験では $r = .31 \sim .48$ （いずれも $p < .01$ ）、いじめ加害経験では $r = .33 \sim .54$ （いずれも $p < .01$ ）の弱い正の相関から比較的強い正の相関までみられた。

中学2年生（第1回から第3回）と中学3年生（第1回から第3回）の相関についてみると、いじめ被害経験では $r = .44 \sim .61$ （いずれも $p < .01$ ）、いじめ加害経験では $r = .43 \sim .67$ （いずれも $p < .01$ ）の比較的強い正の相関がみられた。

## 考 察

本研究の目的は、いじめ被害経験やいじめ加害経験に関する年度を越えた縦断調査を実施し、その安定性について報告することであった。

本研究では、年度内に3回の調査を3年間にかけて実施した。各調査は3～5か月のスパンをあけて実施しているものの、いじめ被害といじめ加害は比較的安定していることが示された。さらに、年度が変わり、クラス替えや中学校への進学があったにも関わらず、その安定性は低くなることがなかった。

小学5年生と中学1年生のいじめ被害経験やいじめ加害経験は2年後においても同様の経験があることを示していた。しかし、小学5年生と小学6年生のいじめ被害経験や、小学6年生と中学2年生のいじめ被害経験やいじめ加害経験は実施回によって一部無相関もみられた。小学6年生のいじめ加害経験の尺度の信頼性が低かった問題や、サンプルサイズが他と比較してもやや小さかったことなどの影響も考えられるが、今後、この点について詳細に検討する必要があると考えられる。

本研究で得られた知見としては、いじめ被害やいじめ加害はクラスが変わっても安定していることから、いじめの加害や被害を検討する際には、学級要因だけでなく、安定した個人要因も考慮する必要があることが示唆されたことである。

安定したいじめ被害やいじめ加害が引き起こされることについて、Scholte, Engels, Overbeek, de Kemp, & Haselager (2007) は子どもの相互作用スタイルの継続のメカニズムで説明している。子どもの相互作用スタイルの継続とは、例えば、いじめ被害者では、友

だちがいないか、いたとしても仲間から受容されていない子と友だちか、もしくはいじめを受けている子と友だちになる傾向があり (Hodges, Malone, & Perry, 1997; Salmivalli, Huttunen, & Lagerspetz, 1997), そのために彼らの行動が強化されてしまうということである。不適応的な社会的相互作用パターンの継続がいじめ被害者としての立場を継続させてしまうというメカニズムである (Caspi, Bem, & Elder, 1987)。

一方、Averdijk, Malti, Eisner, Ribeaud, & Farrington (2016) は、7歳から11歳までの縦断調査でいじめ被害が、反応的攻撃性や、不安や抑うつといった内的問題を媒介して、いじめ被害を引き起こすことを示している。この研究では、いじめ被害が安定する理由として、いじめ被害を受けたことによる本人の反応的攻撃性を高めたり、本人の内的問題を引き起こしたりすることによって、再びいじめ被害を受けてしまうということを指摘している。

本研究では、いじめ被害やいじめ加害の長期的な安定性の要因については検討を行っておらず、今後は縦断調査によっていじめに関わる個人に安定した要因について調べていく必要があるだろう。長期的ないじめ加害やいじめ被害は短期的なものとは比べても不適応であることが指摘されている (Juvonen, et al., 2000; Scholte, et al., 2007)。一度のみのいじめ被害やいじめ加害の問題と継続するいじめ被害やいじめ加害の問題は要因が異なる可能性もあり、別に考える必要があるかもしれない。

最後に、本研究では、いじめ被害者を支援するために、記名式で調査を実施し、その後のサポートも行ってきた。教師の信念は、被害者へのサポートに影響することが示されている (Troop-Gordon & Ladd, 2015)。介入の可能性のある条件の下で得られた結果であることには留意する必要がある。また、前青年期においては、仲間集団のヒエラルキー構造は安定しているので、いじめの安定性がみられたかもしれず (Schäfer, Korn, Brodbeck, Wolke, & Schulz, 2005), 小学校の中学年や低学年では、同様の安定性が示されない可能性も考えられる。

## 注

<sup>1</sup> 対応のある相関係数の差の検定を実施するにあたり、対応するデータのみを分析対象とした。例えば、いじめ加害経験における、中学1年生の第3回と中学2年生の第1回の相関係数と、中学1年生の第2回と第3回の相関係数の比較では、サンプルサイズ  $n = 236$ , 中学1年生の第3回と中学2年生の第1回の相関係数は $r = .60$ , 中学1年生の第2回と第3回の相関係数は $r = .37$ , 中学1年生の第2回と中学2年生の第1回の相関係数は $r = .47$ を分析に用いた。

## 付 記

本研究は、平成29年度～平成31年度愛知教育大学学  
長裁量経費（代表：大村恵）を受けて実施した。

## 引 用 文 献

- Averdijk, M., Malti, T., Eisner, M., Ribeaud, D., & Farrington, D. (2016). A vicious cycle of peer victimization? Problem behavior mediates stability in peer victimization over time. *Journal of Developmental Life-Course Criminology*, 2, 162-181.
- Burk, L. R., Armstrong, J. M., Park, J., Zahn-Waxler, C., Klein, M. H., & Essex, M. J. (2011). Stability of early identified aggressive victim status in elementary school and associations with later mental health problems and impairments. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 39, 225-238.
- Caspi, A., Bem, D. J., & Elder, G. H., Jr. (1987). Moving against the world: Life-course patterns of explosive children. *Developmental Psychology*, 23, 308-313.
- 原田 宗忠・中井 大介・黒川 雅幸 (2020). 自己像の不安定性といじめ被害がいじめ加害行動に及ぼす影響 パーソナリティ研究, 29, 50-60.
- Hodges, E. V. E., Malone, M. J., & Perry, D. G. (1997). Individual risk and social risk as interacting determinants of victimization in the peer group. *Developmental Psychology*, 33, 1032-1039.
- Juvonen, J., Nishina, A., & Graham, S. (2000). Peer harassment, psychological adjustment, and school functioning in early adolescence. *Journal of Educational Psychology*, 92, 349-359.
- 松本 麻友子・山本 将士・速水 敏彦 (2008). 高校生における仮想的有能感といじめとの関連 教育心理学研究, 57, 432-441.
- 文部科学省(2020). 令和元年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」について 文部科学省 Retrieved from [https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext\\_jidou\\_02-100002753\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou_02-100002753_01.pdf) (2021年3月20日)
- 岡安 孝弘・高山 巖 (2000). 中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, 48, 410-421.
- Olweus, D. (1993). *Bullying at school: What we know and what we can do*. New York: Blackwell.
- 大西 彩子 (2007). 中学校のいじめに対する学級規範が加害傾向に及ぼす効果 カウンセリング研究, 40, 199-207.
- Salmivalli, C., Huttunen, A., & Lagerspetz, K. M. J. (1997). Stability in bullying and victimization and its association with social adjustment in childhood and adolescence. *Scandinavian Journal of Psychology*, 38, 305-312.
- Salmivalli, C., Lappalainen, M., & Lagerspetz, K. M. J. (1998). Stability and change of behavior in connection with bullying in schools: A two-year follow up. *Aggressive Behavior*, 24, 205-218.
- Schäfer, M., Korn, S., Brodbeck, F. C., Wolke, D., & Schulz, H. (2005). Bullying roles in changing contexts: The stability of victim and bully roles from primary to secondary school. *International Journal of Behavioral Development*, 29, 323-335.
- Scholte, R. H., Engels, R. C. M. E., Overbeek, G., de Kemp, R. A. T., & Haselager, G. J. T. (2007). Stability in bullying and victimization and its association with social adjustment in childhood and adolescence. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 35, 217-228.
- Sourander, A., Helstelä, L., Helenius, H., & Piha, J. (2000). Persistence of bullying from childhood to adolescence: A longitudinal 8-year follow-up study. *Child Abuse & Neglect*, 24, 873-881.
- 外山 美樹・湯 立 (2020). 小学生のいじめ加害行動を低減する要因の検討——個人要因と学級要因に着目して—— 教育心理学研究, 68, 295-310.
- Troop-Gordon, W., & Ladd, G. W. (2015). Teachers' victimization-related beliefs and strategies: Associations with students' aggressive behavior and peer victimization. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 43, 45-60.

(2021年8月30日受理)